東海大学紀要海洋学部「海―自然と文化」 第８巻第１号　43-50頁（2010）
Journal of The School of Marine Science and Technology, Tokai University, Vol.8, No.1, pp. 43-50, 2010

玄奘訳の疑問辞「頗有」

瀧川郁久*1

Interrogative ‘*poyou*’（頗有）in Xuanzang’s translations

Ikuhisa TAKIGAWA

Abstract

To study the Indian Buddhist philosophy through Chinese translations, we have to give much attention to their specific wordings. In particular, to grasp the point of argument in a treatise, it is very important to understand precisely how Sanskrit words that serve grammatical functions are translated into Chinese. As an example of a comparative study of syntax, I will examine a Middle Chinese interrogative ‘*poyou*’（頗有）and its Sanskrit equivalent ‘*syāt*’ in the *Abhidharmakośabhāṣya*.

１．はじめに

説一切有部のアビダルマ文献は，インド仏教の教理研究の基礎となるべきものであるが，サンスクリット語原典がほとんど発見されておらず，チベット語訳も残っていないものが多い．まとまった資料としては漢訳が残っているが，チベット語訳にくらべて漢訳からサンスクリット語の構文を想定することは非常に難しい．その理由としては，チベット語訳[1]のようにサンスクリット語文の逐語訳になっていないこと，翻訳者によって訳語やスタイルが全く異なること，などが挙げられる．したがって，漢訳資料全体にわたる構文の研究や，汎用性のある構文レベルでの索引類の作成は困難であると思われるが，特定の漢訳者による資料に限れば，ある程度の正確さを期した研究が可能なのではなかろうか．

玄奘の漢訳は，(1) 訳業が組織的で，訳語・スタイルに一貫性があると考えられること，(2) 重要なアビダルマ文献が一揃い訳出されていること，(3) サンスクリット語原典と漢訳，チベット語訳を対照できる複数のテキストがあること，(4) 先行する別の漢訳と対照できること，などの理由から，構文レベルでの対照研究にもっとも相応しいと思われる．そこで，玄奘によって漢訳されたアビダルマ文献を資料として，漢訳とサンスクリット語原文との構文レベルでの対照研究を試みたい．

本稿では，『阿毘達磨大毘婆沙論』『阿毘達磨発智論』などのアビダルマ文献に頻出し，構文上も特徴的な疑問辞「頗有」の用法を，『阿毘達磨倶舎論』のサンスクリット語原典と漢訳とを対照しながら検討する．

疑問文の文頭に「頗」を置く用語法は，中古漢語[2]の顕著な特徴としてこれまでにいくつもの研究が発表されている．まず，中古漢語における疑問辞としての「頗」の用法について，先行研究を瞥見しておく．

２．疑問辞としての「頗」

中古漢語に特有の「頗」の用法に逸早く着目した論考として，吉川（1947）がある．この語法を吉川は「そもそも疑問は，その事態が不確実であり，断定を躊躇するが故にこそ，問うのである．すこしはの意を現わす頗（ポ）を，提出せんとする事態の上にかぶせ，事態の確実さを，あらかじめ少い目に制限しておくということは，その不確実さを，一層はっきりさせる点で，妥当であるばかりでなく，不確実な事態を問うべきためらいの言葉は，頗 po という一音を語頭に伴い，その一音を経過するだけの時間を増すことによって，語調にも一層のためらいを，もち来たし得るからである」と説明している[3]．

水谷（1954）は，漢訳仏典の「頗」について，「句末の

2009年11月30日受付　2010年２月25日受理
＊1　東海大学清水教養教育センター（The General Educaion Center, Shimizu, The School of Marine Science and Technology, Tokai University）

「不」或は「耶」等の語と照応する一連の疑問詞と見るべき」ものとし，また「経音義」で繰り返し注記されていることに注意を促して，この語型が唐代においても「世間に於て甚だポピュラーな通常の語型と云ふのではなく（中略）当時使はれてゐたとしても，社会の特殊な階層の用語として生きてゐたものであるとでも解するのが，合理的なのではないかと思はれる」と指摘する[4]．

森野（1975）は六朝期の「頗」について「「世説」をはじめとして，その用例は全て「頗～不」という形であるが，訳経（増壱阿含経）においては，ほとんどが「頗～乎」であり，その他「頗～不」「頗～耶」「頗～也」の例が少数見られる」ことを指摘し，口語をできるだけ取り入れようとする傾向と評している[5]．

後に見るように，玄奘訳『倶舎論』では，文末に疑問辞がなく「頗」が単独で用いられるもの6例，「頗～不」5例，「頗～耶」17例である（ただし，仏典では同じ箇所での繰り返しが多いので，この用例の数をそのまま傾向と見なすことはできない）．

曹・遇（2006）は，「“頗”は主に後漢以降に用いられるが，後漢の訳経中では『中本起経』に「頗VP不」の用例が見られるのみで，他はすべて南北朝期の訳経である．漢籍では『三国志』と『世説新語』にわずかに用例があるのみ」であるとして，漢訳経典と漢籍の用例の一覧表を掲げている[6]．

高（2007）も漢籍と仏典における「頗」の用例の頻度を比較し，語気副詞としての用例の割合は仏典では高く，漢籍では口語的な作品に現われるのみであるとする[7]．

このように，「頗」を疑問文の文頭に置く用法は漢訳仏典に頻出するが[8]，仏典における「頗」の意味を論じる際にしばしば出発点とされるのは，慧琳の『一切経音義』にある次の定義である．

「頗有．破麼反．字書云，頗猶可也，或云不可也，亦作叵也．」（T54, 420a15）[9]

江（2000）は，この『一切経音義』の記述を受けて「頗」は「不可」を意味する「可」と同義であり，したがって「叵」と同義であるとする[10]が，これに対し，劉（2008）はこれを批判して「不可」を意味するのは唐代の新しい用法であって，六朝以前の中古漢語には用例が見られないとし，なお検討の余地ありとする[11]．『一切経音義』の解釈そのものが古くから問題になっていたことは，すでに水谷（1954）が指摘している[12]．

以上，「頗」を文頭に置く疑問文が，中古漢語の特徴的な語法であり，特に漢訳仏典に用例が多いこと，文末に置かれる「不」「耶」などの疑問辞とともに用いられること，少なくとも玄奘訳の時代には，「可」「不可」と通じるものと考えられていたこと，などを確認した．

ところで，以上の諸論考はいずれも中古漢語の研究の一環としてなされたものであり，漢訳仏典中の用例が数多く指摘されているにもかかわらず，管見したかぎりではサンスクリット語原文との対照研究はほとんどなされていないようである．しかし，用例が圧倒的に漢訳仏典に多いことからしても，この語法と仏典の漢訳との間には密接な関係があると考えるべきであろう．少なくともサンスクリット語から漢訳された仏典中の用例については，漢語としての構文の検討とあわせて，サンスクリット語の構文との比較を行う必要がある．唯一，水谷（1954）でサンスクリット語の構文との関係が指摘されているが[13]，同じ文型の用例が本稿で取り上げた玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』中に一例（ex. 8）だけ見出される．これについては後述する．

3．玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』の用例

以下に玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』から抽出した「頗有」のすべて用例と，サンスクリット語原文との対応を確認する．

用例ごとに玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』［玄］と，真諦訳『阿毘達磨倶舎釈論』［真］の大正蔵（29巻）の頁段，Pradhan（1967）校訂の *Abhidharmakośabhāṣya*［Pr.］の頁行を示す（句読点は適宜修正した．特に大正蔵所収の真諦訳の句読点は，不適切なところが多い[14]）．

ex. 1.
［玄 24a18-19］頗有死生，不捨不得，有情同分．應作四句．
［真 182c1-2］有退亦生，不捨聚同分，不得同分不．立此成四句．
［Pr. 67,18-19］syāc cyavetopapadyeta na ca sattvasabhāgatāṃ vijahyān na ca pratilabheteti. catuṣkoṭikaḥ.

ex. 2.
［玄 32b14-15］頗有已生諸無漏法非未生位無漏法因．有．謂 ...
［真 190b1-2］若無流已生，可得非未生無流因不．有．如 ...
［Pr. 88,6］syād utpanno ’nāsravo ’nutpannasyāsravasya na hetuḥ. syāt. tadyathā ...

ex. 3.
［玄 32b16-18］頗有一身諸無漏法前所定得非後生因．有．謂未來苦法忍品 ...
［真 190b3-4］一切勝於劣非同類因，先所得無流法，定在一相續中，於後生無流，可非因不．有．謂未來苦法智忍 ...
［Pr. 88,8］syād ekasaṃtānaniyataḥ pūrvapratilabdho ’nāsravo dharmaḥ paścādutpannasya na hetuḥ. syāt. anāgatāḥ ...

ex. 4.
［玄 32b19-20］頗有前生諸無漏法，非後已起無漏法因．有．謂前生勝 ...
［真190b6-7］前已生無流法，於後已生無流法，可非因不．有．謂勝於下類 ...
［Pr. 88,10-11］syāt pūrvotpanno 'nāsravo dharmaḥ paścādutpannasyānāsravasya na hetuḥ. syāt. adhimātro nyūnasya.

ex. 5.
［玄 32c28-29］頗有法是不善，唯不善爲因耶．有．謂聖人 ...
［真 190c10-11］有法不善，唯不善爲因不．有．若聖人 ...
［Pr. 89,12］syād dharmo 'kuśalo 'kuśalahetuka eva. syāt. āryapudgalaḥ ...

ex. 6.
［玄 37b18-19］頗有法於法，全非四緣不．有．謂自性於自性於他性．亦有．謂有爲於無爲．無爲於無爲．
［真 194c23-25］有法於餘法，由四緣成緣不．有．謂自性於自性，他性於他性，無爲於有爲，無爲於無爲．
［Pr. 100,15-17］syād dharmo dharmasya caturbhir api pratyayair na pratyayaḥ. syāt svabhāvaḥ svabhāvasya parabhāvo 'pi. syāt. saṃskṛtam asaṃskṛtasyāsaṃskṛtaṃ cāsaṃskṛtasya.

ex. 7.
［玄 55c17-19］頗有觸等爲緣資益諸根大種而非食耶．有．謂異地無漏觸等．
［真 212c26-27］爲有緣觸等得諸根滋益，及四大增長，是諸亦非食不．有．謂別地及無流．
［Pr. 154,20-22］syāt sparśādīn pratītyendriyāṇām upacayo mahābhūtānāṃ ca vṛddhir na ca ta āhārāḥ. syāt. anyabhūmikānanāsravāś ca.

ex. 8.
［玄 64c17-20］頗有梵志沙門，正於今時，與喬答摩氏平等平等得無上覺耶．... 今時無有 ...
［真 222c2-6］於今時，爲有沙門婆羅門，與瞿曇沙門平等平等於無上菩提不．... 於今時無有 ...
［Pr. 184,23-25］asti kaścid etarhi śramaṇo vā brāhmaṇo vā samasamaḥ śramaṇena gautamena yadutābhisaṃbodhāya. ... nāsti kaścid etarhi ...

ex. 9.
［玄 81b7-8］頗有業感心受，異熟非身耶．曰有．謂善無尋業．
［真 237b26-27］爲有如此不．由此業以心法爲體受．爲此業熟果報不．有．謂無覺善業．
［Pr. 228,19-20］syāt karmaṇaś caitasiky eva vedanā vipākaḥ vipacyeta. syāt. kuśalasyāvitarkasya karmaṇa iti.

ex. 10.
［玄 81b8-9］頗有三業非前非後受異熟耶．曰有．謂順樂受業色 ...
［真 237b29-237c1］有三業果報熟無前無後不．有．有樂受業色 ...
［Pr. 228,22-23］syāt trayāṇāṃ karmaṇām apūrvācaramo vipāko vipacyeta. syāt. sukhavedanīyasya rūpam ...

ex. 11.
［玄 82a6］頗有四業俱時作耶．容有．云何．遣三使已 ...
［真 238a23-24］於一刹那中，得引四業，俱起不．得．云何得．於三教他 ...
［Pr. 230,13-14］syād ekasmin kṣaṇe caturvidhaṃ karmākṣipet. syāt. triṣu paraṃ prayojya ...

ex. 12.
［玄 82c17-18］於諸業中，頗有唯招心受異熟，或招身受非心受耶．亦有．
［真 239a5］有業但以身受爲果報非心受不．說有．
［Pr. 233,4-5］syāt karmaṇaś caitasiky eva vedanā vipāko vipacyeta na kāyikī. syāt. kāyiky eva na caitasikī syād ity āha ...

ex. 13.
［玄 85a16-17］頗有已害生殺生未滅耶．曰有．如已斷生命 ...
［真 241a1-2］爲有如此義不．是衆生已被殺，是人未離殺生事．有．譬如已令此衆生離命根 ...
［Pr. 240,3-4］syāt prāṇī hataḥ prāṇātipātaś cāniruddhaḥ. syāt. yathā hi tat prāṇī ...

ex. 14.
［玄 86b8-10］頗有殺者起殺加行，及令果滿，而彼不爲殺罪觸耶．曰有．云何．謂能殺者...
［真 241c22-23］若人行殺生事，果亦究竟，不犯殺生罪，有如此義不．有．若能殺人 ...
［Pr. 242,23-24］syāt prayogaṃ kuryāt phalaṃ ca paripūrayen na ca prāṇātipātāvadyena spṛśyeta*. āha. syāt. yathāpi tadvyaparopakaḥ ...
* spṛśyate を訂正．Cf. ex. 16-18; D 203a3: reg par mi 'gyur ba.

ex. 15.
［玄 87c28-29］頗有由身表異想義，不由發語，成虛誑語耶．曰有．
［真 243a17］若人由身顯義異，爲有妄語不．有．

[Pr. 246,9] yaḥ kāyenānyathātvaṃ prāpayet syān mṛ̥ṣāvādaḥ. syāt.

ex. 16.
[玄 87c29-88a1] 頗有不動身，殺生罪觸耶．曰有．謂發語．
[真 243a18-19] 爲有不由身行殺生事，犯殺生罪不．有．若由言行．
[Pr. 246,10] syān na kāyena parākrameta prāṇātipātāvadyena ca spṛ̥śyeta. syāt. vācā parākrameta.

ex. 17.
[玄 88a1-2] 頗有不發語，誑語罪觸耶．曰有．謂動身．
[真 243a20] 爲有不由言行妄語事，犯妄語罪不．有．若由身行．
[Pr. 246,11] syān na vācā parākrameta mṛ̥ṣāvādāvadyena ca spṛ̥śyeta. syāt. kāyena parākrameta.

ex. 18.
[玄 88a2-4] 頗有不動身不發語，二罪所觸耶．曰有．謂仙人意憤，及布灑他時．
[真 243a21-22] 爲有不由身口行此事，犯殺生妄語罪不．有．如由仙人心忿責，此中引布薩譬爲證．
[Pr. 246,11-13] syān na kāyena na vācā parākrameta ubhayāvadyena ca spṛ̥śyeta. syāt. ṛ̥ṣīṇāṃ manaḥpradoṣeṇa poṣadhanidarśanaṃ cātreti.

ex. 19.
[玄 94a1-3] 頗有令男離命根，非父阿羅漢而爲無間罪觸不．曰有．謂母轉形．
[真 248a27-28] 爲有如此不，令男人離命根，非父非阿羅漢，而爲無間罪所觸不．有．若母轉根．
[Pr. 263,2-3] syāt puruṣaṃ jīvitād vyaparopayen na pitaraṃ nārhantam ānantaryāvadyena ca spṛ̥śyeta. syāt. māturvyañjanaṃ parivṛ̥ttaṃ syād iti.

ex. 20.
[玄 94a3-5] 頗有令女離命根，非母阿羅漢而爲無間罪觸不．曰有．謂父轉形．
[真 248a29-248b1] [爲有如此不，]* 令女人離命根，非母非阿羅漢，而爲無間罪所觸不．有．若父轉根．
* ex. 19 の「爲有如此不」がこの文までかかる．
[Pr. 263,3-4] syāt strīṃ jīvitād vyaparopayen na mātaraṃ nārhantīm ānantaryāvadyena ca spṛ̥śyeta. syāt. piturvyañjanaṃ parivṛ̥ttaṃ syād iti.

ex. 21.
[玄 96c8-9] 頗有施非聖果亦無量耶．頌曰 ...
[真 250c26] [Pr. 270,24] 対応なし．

ex. 22.
[玄 102c10-12] 頗有隨眠不緣無漏不緣上界，而彼隨增但於相應非所緣不．有．謂緣上地諸遍行隨眠．
[真 256b11-12] 有諸惑不緣無流爲境，非遍行不同分界，此惑但由相應得隨眠不由緣境不．有．謂遍行非同分地惑．
[Pr. 290,6-8] syur anuśayā nānāsravālambanā na visabhāgadhātusarvatragāḥ, te cānuśayāḥ saṃprayogato 'nuśayīran nālambanataḥ. syuḥ*. visabhāgabhūmisarvatragā anuśayāḥ.
* Pradhan 本は na を補うが不要．

ex. 23.
[玄 108c5-7] 頗有見相應法爲愛結繫非見結繫，非不有見隨眠隨增．曰有．云何．集智已生 ...
[真 262a1-3] 爲有此義不．與見相應法中，但由隨順結相應，不由見結，於中見結隨眠非非隨眠．說有．集智已生 ...
[Pr. 309,4-6] syād dṛ̥ṣṭisaṃprayukteṣu dharmeṣv anunayasaṃyojanena saṃyukto na dṛ̥ṣṭisaṃyojanena na ca tatra dṛ̥ṣṭyanuśayo nānuśayīta. āha, syāt. samudayajñāna utpanne ...

ex. 24.
[玄 121a5-6] 頗有此生創修此行，即此生引起順決擇分耶．不爾．
[真 273a20-21] 但於今生作功力，生決擇分能善根，爲有如此義不．必定無如此義．
[Pr. 349,2-3] kiṃ punaḥ prathama eva janmani kṛ̥taprayogo nirvedhabhāgīyāny utpādayet. naitad asti.

ex. 25.
[玄 136c16-18] 頗有不繫心，能了別欲界法耶．曰能了別．謂非常故苦故 ...
[真 288a15-16] 若不相應心，爲得知與欲界相應法不．得知．由無常苦 ...
[Pr. 399,9] syād apratisaṃyuktena cittena kāmapratisaṃyuktān dharmān vijānīyād ity āha. vijānīyāt*. anityato duḥkhataḥ ...
* “ity āha. vijānīyāt” チベット語訳により補う[15]．Cf. ex. 26.

ex. 26.
[玄 136c25-26] 頗有見斷心，能了別欲界繫法耶．曰能了別．謂我故我所故．
[真 288a23-26] 由見諦所滅心，爲知與欲界相應法不．得知．由我由我所...
[Pr. 399,13-14] syād darśanaprahātavyena cittena kāmapratisaṃyuktān dharmān vijānīyād iti āha. vijānīyāt. ātmataḥ ...

ex. 27.
［玄 138a19-21］頗有一念智縁一切法不．不爾．
［真 289b9］由一智能知一切法不．不得．
［Pr. 404,20］syād ekena jñānena sarvadharmān jānīyāt. na syāt.

ex. 28.
［玄 148a27-29］頗有淨定由離染得，由離染捨，由退由生，爲問亦爾．曰有．謂順退分 ...
［真 299c1-4］爲有如此不．或由離欲至得清淨定，或由離欲棄捨清淨定，由退墮及受生亦爾．説有．約退墮分初定 ...
［Pr. 443,1-2］syāc chuddhakaṃ dhyānaṃ vairāgyeṇa pratilabheta vairāgyeṇa vijahyāt, evaṃ parihāṇyā copapattyā ca. syāt. dhānabhāgīyam ...

以上の用例から抽出される玄奘訳とサンスクリット語原文の構文を対照表に整理すると次のようになる．サンスクリット語原文の *opt.* は動詞の願望法（optative）が使われていることを示し，*nom.* は名詞文（nominal sentence）であることを示す．

	玄奘訳		サンスクリット語原文
ex. 1	頗有～？		syāt *opt.?* syāt.
ex. 2	頗有～？	有．	syāt *nom.?* syāt.
ex. 3	頗有～？	有．（謂～）	syāt *nom.?* syāt.
ex. 4	頗有～？	有．（謂～）	syāt *nom.?* syāt.
ex. 5	頗有～耶？	有．（謂～）	syāt *nom.?* syāt.
ex. 6	頗有～不？	有．（謂～）	syāt *nom.?* syāt.
ex. 7	頗有～耶？	有．（謂～）	syāt *nom.?* syāt.
ex. 8	頗有～耶？	無有．	asti kaścit *nom.?* nāsti.
ex. 9	頗有～耶？	曰有．（謂～）	syāt *opt.?* syāt.
ex. 10	頗有～耶？	曰有．（謂～）	syāt *opt.?* syāt.
ex. 11	頗有～耶？	容有．（云何）	syāt *opt.?* syāt.
ex. 12	頗有～耶？	亦有．（云何）	syāt *opt.?* syāt.
ex. 13	頗有～耶？	曰有．	syāt *nom.?* syāt.
ex. 14	頗有～耶？	曰有．（云何）	syāt *opt.?* syāt.
ex. 15	頗有～耶？	曰有．	syāt *opt.?* syāt.
ex. 16	頗有～耶？	曰有．（謂～）	syāt *opt.?* syāt.
ex. 17	頗有～耶？	曰有．（謂～）	syāt *opt.?* syāt.
ex. 18	頗有～耶？	曰有．（謂～）	syāt *opt.?* syāt.
ex. 19	頗有～不？	曰有．（謂～）	syāt *opt.?* syāt.
ex. 20	頗有～不？	曰有．（謂～）	syāt *opt.?* syāt.
ex. 21	頗有～耶？		—
ex. 22	頗有～不？	有．（謂～）	syuḥ *nom.?* syuḥ.
ex. 23	頗有～？	有．（云何）	syāt *opt.?* syāt.
ex. 24	頗有～耶？	不爾．（云何）	kiṃ punaḥ *opt.?* na asti.
ex. 25	頗有～耶？	能了別．（謂～）	syāt *opt.? opt.*
ex. 26	頗有～耶？	能了別．（謂～）	syāt *opt.? opt.*
ex. 27	頗有～不？	不爾．	syāt *opt.?* na syāt.
ex. 28	頗有～？	曰有．（謂～）	syāt *opt.?* syāt.

以上のように，玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』（以下『倶舎論』）の「頗有」のほとんどの用例が，サンスクリット語の不変化辞 syāt を文頭に置く疑問文に対応しており，それに対する返答の多くも syāt となっている．これ以外の用例は，ex. 8, ex. 21, ex. 22, ex. 24 の 4 例のみであるが，そのうち ex. 21 はサンスクリット語原文に直接の対応がなく，また ex. 22 はテキストに疑わしい点がある[16]ので考察から除外する．したがって，例外としては ex. 8 と ex. 24 が残る．この 2 例は最後に考察を行うことにして，まず syāt を用いた問答を考察する．

4．不変化辞 syāt を用いた問答

疑問文の文頭に置かれ，その返答にも用いられる syāt が定動詞（$\sqrt{\text{as-}}$ の願望法三人称単数の活用形 syāt）でないことは，別に定動詞がある用例や，主語が複数の用例があることからも明らかである．玄奘訳はこの syāt に「頗有」という漢訳語を与えている．一方，同じ箇所の真諦訳を見ると，文頭に「頗」を置く用例は一例も無く[17]，文頭に「爲」を置いて「爲～不」とするか，または文末に「不」を置くのみである[18]．

前後の議論の説明なしに引用箇所だけ訳しても意味が分らないものが多いので，上の用例にはあえて和訳をつけなかったが，分りやすいものを一例だけ訳出して確認しておこう．

ex. 16
［Pr. 246,10］syān na kāyena parākrameta prāṇātipātāvadyena ca spr̥śyeta. syāt. vācā parākrameta.

身体によって実力行使しないで，殺生罪（他の生き物に危害を加えること）に触れるということがあり得るか．あり得る．言葉によって実力行使し得る．
［玄 87c29-88a1］頗有不動身殺生罪觸耶．曰有．謂發語．

通常，殺生罪は身体による暴力行為に適用されるが，それ以外にも殺生罪に触れるような事態が「あり得るか」，その可能性を尋ねる疑問文に，「あり得る」と返答しているのである．返答の「有」の原文も syāt であることに注意する必要がある．また，この用例のように，返答の「有」の後に「謂」「云何」を置いて，どのような場合にそのことがあり得るかを説明する構文が多いが，この場合の「謂」「云何」は別のサンスクリット語に対応するものではないから，ここまでを含めて syāt を訳したものと見なすべきかもしれない．

このような syāt の用法については Mathilal（1990）の「それは「A は B であるか？」という直接疑問に対する返答に用いられる「はい」（Yes）「いいえ」（No）「あり得る（may be）」（Syāt）という三つの語のうちのひとつである[19]」という説明が参考になる．すなわち，疑問文のはじめに不変化辞の syāt を置いて「以下のことがあり得る

か」と問い，これに syāt「あり得る」と答える文型である．

5．その他の例

“asti kaścit”を用いる疑問文が「頗有」を用いて訳される例が，上に見た玄奘訳『倶舎論』の用例中に 1 例（ex. 8）だけ見出されるが，この構文は漢訳経典中に散見する．水谷（1954）はこれを「この kecit 云々が，疑問文に用ゐられてゐて，而も実現稀少，乃至は実現に多大の疑問を感じて，或る場合には非実現をも心に懐き，半ば反語の如く言葉を出す様式の原文に対する中国語が，「頗有人……不？」に当るものであると考へられる[20]」と解する．

玄奘訳『倶舎論』の用例は次のとおりである．

ex. 8.

[Pr. 184, 23-25]asti kaścid etarhi śramaṇo vā brāhmaṇo vā samasamaḥ śramaṇena gautamena yadutābhisaṃbodhāya. ... nāsti kaścid etarhi ...

「今，だれかシュラマナあるいはブラーフマナで，シュラマナ［である］ガウタマ（＝ブッダ）と悟りについて全く同等の者がいるか」．……「今，［そのような者は］だれもいない……」．

［玄 64c17-20］頗有梵志沙門，正於今時，與喬答摩氏平等平等得無上覺耶．... 今時無有 ...

この用例も経典からの引用である[21]．これらの例を水谷（1954）は，kaścit が疑問文に用いられる場合，とするが，サンスクリット語文の用例を見ると，それは熟語的に“asti kaścit”の形で用いられる場合であることが分かる．玄奘と真諦がともに syāt を文頭に置く疑問文の漢訳に用いたのと同じ構文「頗有～耶」「爲有～不」を採用していることから，彼らは“asti kaścit”を用いる構文と syāt を文頭に置く疑問文とを，同じような種類の疑問文と解していたと考えられる．

不変化辞 asti と不定代名詞 kaścit を用いる疑問文は，Speijer（1886）が「疑問辞を伴わない疑問文の例」として挙げる次の用例と同じ構文である[22]．

asti tasya durātmanaḥ pratiṣedhopāyaḥ kaścit.
なにかあの悪党をくい止める方法はないものか．

このように，不変化辞 asti と不定代名詞（kaścit など）を組み合わせた疑問文も，不変化辞 syāt を用いた疑問文の場合と同じく，可能性を問うものと見てよかろう．

最後に，もう一つの例外的な用例（ex. 24）を検討する．

ex. 24.

[Pr. 349,2-3] kiṃ punaḥ prathama eva janmani kṛtaprayogo nirvedhabhāgīyāny utpādayet. naitad asti.

「[順解脱分の］修行をなした者が，その同じ最初の生存において［四つの］決択分を起こすということが，そもそもあり得るか．」「そういうことはない．」

［玄 121a5-6］頗有此生創修此行，即此生引起順決擇分耶．不爾．

［真 273a20-21］但於今生作功力，生決擇分能善根，爲有如此義不．必定無如此義．

ここでも，玄奘と真諦がともに「頗有～耶」「爲有～不」を採用しており，両者ともこの文章をこれまでに見た二つの疑問文と同じ種類の疑問文と解していたと考えられる．

kaścit や kiṃ punaḥ と同じく，疑問辞と小辞の組み合わせを用いる疑問文の漢訳に「頗」を用いている例が，『唯識二十論』の玄奘訳にあるので，真諦訳とあわせて紹介しておく．

kaccit te gṛhapate śrutaṃ kena tāni daṇḍakāraṇyāni mātaṅgāraṇyāni kaliṅgāraṇyāni śūnyāni medhyībhūtāni[23].

「家長よ，何が理由でダンダカ林，マータンガ林，カリンガ林が空虚で閑疎になったか，聞いたことがあるか．」

［玄奘訳 T31, 77a13-14］汝頗曾聞，何因緣故，彈吒迦林，末蹬伽林，羯陵伽林，皆空閑寂．

［真諦訳 T31, 73b23-5］長者汝曾聞不，云何檀陀柯林，迦陵伽林，摩登伽林，空寂清淨．

この疑問文に用いられている疑問辞 kaccit は，肯定の答えを予想するもので[24]，構文が異なるが，いまは参考までに挙げておいた．実は，『瑜伽師地論』をはじめとする玄奘訳の瑜伽行派文献中には，有部文献とは対照的に，今回取り上げた「頗有」の用例がほとんど見られない．このような構文上の差異については，将来の検討課題としたい．

6．まとめ

本稿では，玄奘訳アビダルマ文献の構文研究の一環として，『倶舎論』を資料として，疑問辞「頗有」を用いる疑問文の構文をサンスクリット語の構文と対照して検討した．その結果，(1) 玄奘訳『倶舎論』で「頗有」を文頭に置く疑問文は，ほとんどの場合，不変化辞 syāt を文頭に置き，「(以下のことが) あり得るか」と，ある事態の起こる可能性を問う疑問文の翻訳であること，(2) その返答にも syāt「あり得る」が用いられ，「有」と漢訳されていること，(3) 例外的に syāt を用いない疑問文が「頗有」で訳されている場合があり，それもやはり可能性を問う疑問文であること，などが明らかになった．

※本研究は，東海大学総合研究機構研究奨励補助金による研究の成果の一部である．

[1] チベット語訳資料とサンスクリット語原典資料を構文レベルで対照させたデータベースの構築が試みられている．鈴木（2000）参照．Tibetan-Sanskrit 構文対照電子辞書 eDic（http://suzuki.ypu.jp/edic/edic.html）．

[2] 「中古漢語」の範囲は研究者によってまちまちである（周（2009）1-4 に諸研究者の見解がまとめられている）．本稿は，漢語史そのものを主題とするものではないから，あくまでも便宜上の呼称として，おおまかに鳩摩羅什から玄奘までを含む時期（4～7 世紀頃）の漢語を指して用いることにする．

[3] 吉川（1947）497-498.

[4] 水谷（1954）45.

[5] 森野（1975）221. なお，長尾（2006）96-97 は，『世説新語』の文末疑問語気助詞の数を「不 28，乎 2，耶 5」と数え「不が優勢であるという5世紀の言語が反映している」とする．森野（1983）71; 森野（1989）pp. 16-17 参照．

[6] 曹・遇（2006）54-55.

[7] 高（2007）184.

[8] 今回取り上げたアビダルマ文献の他，律蔵の漢訳にも「頗」を用いた疑問文が頻出する．これについては本稿では触れられなかったので，別の機会に考察したい．

[9] 玄奘訳『大乗大集地蔵十輪経』巻第四の「頗有佛土」（T13, 739c11）に対する注釈．

[10] 江（2000）68; 80-82.

[11] 劉（2008）52-53; 247.

[12] 水谷（1954）43-44.

[13] 水谷（1954）47-48.

[14] 例えば，ex. 1 の句読点が大正蔵では「有退亦生．不捨聚同分．不得同分．不立此成四句．」（182c1-2）となっているが，サンスクリット語の原文からも明らかなように，「不立此成四句」の「不」は，前の文の末尾に付く疑問辞として読むべきものである．

[15] ［P 55a6-7; D 48a7］ ’di skad du mi ldan pa’i sems kyis ’dod pa dang ldan pa’i chos rnams shes par ’gyur ba yod dam zhe na. shes par ’gyur te ... Cf. ［P 55b2-3; D 48b2-3］’di skad du mthong bas spang bar bya ba’i sems kyis ’dod pa dang ldan pa’i chos rnams shes par ’gyur ba yod dam zhe na. shes par ’gyur te ...

[16] Ex. 22 は，syuḥ で問うて syuḥ で答える構文になっている．他の用例からして，もともと不変化辞 syāt であったものが誤って定動詞と見なされて三人称複数の活用形に訂正されたと見るべきものと思われるが，あるいは願望法の活用形でも同じ意味の問答が成立すると見るべきであろうか．今のところ他に用例がないので判断は保留しておく．

[17] これは，真諦が「頗」という疑問辞を用いなかったという意味ではない．後に見るように，サンスクリット語の別の構文を漢訳する際には，真諦もたびたび「頗」を用いている．

[18] 中古漢語における「爲～不」の疑問文については，森野（1975）212-213 参照．文末に「不」を置く疑問文については，坂井（1992），北川（2001）参照．

[19] Matilal（1990）305-306: The meaning of *syāt*.

[20] 水谷（1954）47.

[21] Cf. Dīghanikāya, PTS iii, 114, 5ff.

[22] Speijer（1886）§ 412, a. 出典は Pañcatantra.

[23] Lévi（1925）10, 1-14.

[24] Speijer（1886）§ 413, Rem.; 辻（1974）254, § 114.3.c 参照．

略　号

T: 大正新脩大蔵経.
P: 北京版チベット大蔵経.
D: デルゲ版チベット大蔵経.
PTS: Pāli Text Society.

引用文献

（欧文）

Matilal, Bimal Krishna（1990）*Logic, language, and Reality: Indian Philosophy and Contemporary Issues*, Delhi.

Lévi, Sylvain ed.（1925）: *Vijñaptimātratāsiddhi: Deux Traités de Vasubandhu: Viṃśatikā et Triṃśikā*, Paris.

Pradhan, Prahlad ed.（1967）: *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Patna.

Speijer, Jacob Samuel（1886）: *Sanskrit Syntax*, Leiden. rep. Delhi 1990.

（中文）

周俊勛（2009）：中古漢語詞彙研究綱要．巴蜀書社，成都．399p.

江藍生（2000）：近代漢語探源．商務印書館，北京．411p.

劉開驊（2008）：中古漢語疑問句研究．黒龍江人民出版社，哈爾浜．277p.

曹廣順・遇笑容（2006）：中古漢語語法史研究．巴蜀書社，成都．231p.

高育花（2007）：中古漢語副詞研究．黄山書社，合肥．278 p.

（和文）

北川修一（2001）：中古漢語の不字句．アジア・アフリカ言語文化研究，62，239-260．

坂井裕子（1992）：中古漢語の是非疑問文．中国語学，239，125-133．

鈴木隆泰（2000）：Tibetan-Sanskrit 構文対照電子辞書 eDic．明日の東洋学，2000（4），5-7．

辻直四郎（1974）：サンスクリット文法，岩波書店，東京．337p.

長尾光之（2006）：中国語における文末疑問語気助詞の変遷．行政社会論集，19(2)，84-110．

水谷眞成（1954）：「頗」字訓詁小考（中国語史研究，三省堂，東京，1994，42-50 による）．
森野繁夫（1975）：六朝漢語の疑問文．広島大学文学部紀要，34，211-229．
森野繁夫（1983）：六朝訳経の語法と語彙．東洋学術研究，105(22-2)，66-81．
森野繁夫（1989）：六朝語辞雑記（二）疑問表現．中国中世文学研究，19，1-18.
吉川幸次郎（1947）：六朝助字小記（吉川幸次郎全集，第 7 巻，筑摩書房，1968，473-509 による）．

要　旨

漢訳資料によってインド仏教を研究しようとする場合，漢訳仏典特有の用語法に十分注意する必要がある．特に，論書で議論の流れをとらえるためには，サンスクリット語の文法的な機能をもつ単語が，どのように漢語に移されているかを正確に理解することが重要である．構文法の比較研究の一例として，本稿では『阿毘達磨倶舎論』における中古漢語の疑問辞「頗有」とそれに対応するサンスクリット語 syāt を検討する．